

< 県研究主題 >

コミュニケーション能力の素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 橋口 朋矢 (相模原地区)

< 研究主題 >

学級担任による「Hi, friends! 2」Lesson7「桃太郎劇」への取り組み
～卒業を控えた学級経営に外国語活動をどう生かすか～

1 提案内容

(1) 単元について

劇づくりとその発表をする本単元では、次のような必然性が生まれる

- ・一人では劇をつくることができない→友達と協力しなければならない必然性
 - ・一つのものをつくり上げるには試行錯誤をする→友達と話し合う必然性
 - ・観客がいる→相手意識が生まれ、見る人の視点に立って「伝える」ことを考える必然性
- よって、2年間（5・6年）の外国語活動の集大成として位置付けた。卒業を控えた子どもたちや学級経営に生かしていくことができると考え、計画し、実践してきた。

(2) 実践上の工夫（日々の授業づくりで大切にしていることや具体的なしかけ）

① 見通しをもった授業展開と単元計画

6年生最後（2年間の外国語活動の集大成）となる本単元での劇の発表につなげるために、4月からの各単元のゴールとして、スピーチやプレゼンテーションなどの発表をする場を設定し、積み重ねができるようにしてきた。

② 活動の種類や内容の精選 ③環境づくり ④学習形態の工夫 ⑤発表の場の工夫

(3) 成果（○）と課題（●）

○子ども同士の関係が円滑になり、一人より集団での活動を楽しんでいるようになった。

○よりよいものをつくり上げる話し合い(言語活動)や助け合いを充実させることができた。

外国語活動だけでなく、その後の様々な場面でもそうした姿が増えていった。

○達成感を味わうことの大切さに、子どもたちも教師も改めて気付くことができた。

ほとんどのグループが“We are good friends!” “We are happy!” という台詞で劇を締めくくっていた。中には、みんなで手をつないだり肩を組んだりするグループもあった。これは、日本語では躊躇しがちでやりにくい言動でも英語であればできるという、英語をツールとしてコミュニケーションを図る外国語活動だからこそその成果といえる。

また、子どもたちが、1年生などの観客に伝わったと実感できたことや、難しいと思っていたことを自分で、さらには友達と協力して乗り越えられたことも、この達成感につながっていたと考える。

○中学での英語の学習に向けた子どもたちの期待感

●劇づくりでは、担任だけでは英語の正確さに欠けてしまうことがある。ほかの単元以上に、ALTが授業に入る時期や時間数などの調整や、早めの計画・準備などが大切。

●今後の課題として

子どもたちに、コミュニケーション能力の素地をどれだけ育てることができているのかが計りにくく、不安である。 → 中学との連携をいかに進めていくか。

2 協議内容

(1) 単元について

Q：桃太郎に込めた教師の思い（鍵となる台詞）をどのように子どもたちに意識させたのか。

A：どのような物語か、登場人物はどういう人（生き物）たちかなどについて、教師から問いかけた。子どもたちから出てきた意見を絞り、選んで、教師が子どもたちに伝えた。

Q：台詞づくり（日本語→英語）やワークシートの扱いは、どのようにして進めたのか。

A：①日本語でつくった台詞を、次の回までにALTに英訳してもらったり、担任が調べたりして英文にした。中には、辞書で調べてくる子どももいるなど、意欲的だった。

②自分たちでつくった台詞を残し、困った時に戻るためのものとして、ワークシートを用いた。以前から「～を英語で書いてみたい！」などの子どもの声があったので、英語で書きたい子は書くように英文の欄もつくった。ほとんどの子が英文も書いていた。

Q：活動に対して気後れする子や助けが必要な子への支援はどのようにしたのか。

A：個々の特性やそれまでの人間関係などを踏まえてメンバーを構成した。必要な場合には、個人的に声をかけたり、他のメンバーに働きかけたりして、支援してきた。

・「英語を」学ぶのではなく、「英語を活用して」学んでいる、よい実践だと感じた。相手に伝えたいからこそその台詞の言い方であり、ジェスチャーなどの演技だった。

(2) 日々の取り組みについて

Q：活用しているスタンプカードとは、どのようなものか。

A：教師が設定した毎時間共通の4項目と、時々加える簡単な課題（例：Count to 10!）を印刷したもの。それぞれが達成できたと担任が判断した時に、ポンポンとスタンプを押してきた。子どもたちの励みにもなっているようで、年間通して継続して使ってきた。

・劇の発表場面を設定したことで、観客に楽しく分かりやすく伝えたいという必然性ができた。限られた時間ではあるが、単元の始まりにも必然性をもたせられたら素晴らしい。

・劇やプレゼンテーションなど、発表の形をゴールとする場合、表現したいことの内容や方法の難易度と、発する英語量とのバランスが難しい。しかし、それぞれが台詞などをつくり、こう言いたい、こう演じたいという、相手や場面に合わせた表現の工夫が期待できる。

3 まとめ（助言）

(1) 本実践について・・・劇発表というゴールをめざした取組の一つの形。短く、簡単な英語で、これだけのコミュニケーションが図れることを分からせてくれる単元であり、実践であった。

(2) 外国語活動について

① コミュニケーション能力の素地・・・英語で話す必然性のある場面を体験し、それを積み重ねていくことで養われる。

② アウトプットの効用・・・自分の言えない言葉が分かる。相手の反応を見る。通じるかどうかを試せる（確かめられる）。言語への意識が高まる。

③ 英語表現そのものの理解に陥らないように

④ 英語の音とリズムを大切に

⑤ 小中一貫・・・英語への意欲をもった子、英語好き（嫌いにならない）を送り出すことが一つの側面。

⑥ ふり返り・・・体験を学びに変えていくもの。楽しみの中身を教師が定義する。めあてに沿ったふり返りをするすることで、学び＝コミュニケーション体験となる。

<研究主題>

「聞くて楽しい」「伝えて楽しい」すすんで人と関わる外国語活動の授業づくり

1 提案内容

(1) 実践に向けての課題意識

外国語活動への興味・関心が高く、週1回の授業を楽しみにしている児童が多い反面、特定の児童だけが積極的に発表し、自信がない児童は、なかなか自発的に発言しようとしにくい傾向がある。児童の実態を把握している担任自身が外国語活動の計画や展開に関わることで、より充実したコミュニケーション活動ができる授業づくりに取り組んだ。

(2) 学習指導要領と提案テーマとのかかわり

外国語を積極的に用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験するには、失敗を恐れない気持ちを育てれば、外国語活動においても児童がすすんで人と関わられるようになる考えた。そのためには、担任が学習者の手本となるだけでなく、授業計画の作成や、失敗してもよい学級の雰囲気作りが必要であり、そこからテーマの研究をすすめた。

(3) 実践上の具体的な手立て

①オリエンテーション

- ・外国語活動を始める前に見通しをもたせた指導をした。

②授業計画

- ・児童の興味・関心のある教材や他教科との関連性を意識して活動内容を提示した。

③ほめる・英語で反応する・繰り返す

- ・失敗してもその挑戦した気持ちをほめ、次につなげた。担任だけでなく児童たちにも「友達のがよかったところ」を意識させた。

④振り返りカードの活用

- ・授業の終わりにカードに書く時間を設け、項目やめあてごとに振り返りをした。
- ・個々のがんばりにコメントした。振り返りを発表させた。

⑤ELTの活用

- ・月に1回授業についての連絡会を設けた。
- ・毎回授業の中で、担任とELTが会話する場面を取り入れた。
- ・ELTの話した内容を訳さず、英語を使うように心がけた。

⑥学級経営

- ・自分の居場所がある暖かい雰囲気作りを行い、「挑戦すること」を常に意識した。

(4) 実践の成果 (○) と課題 (●)

○ELTとの連絡会をもつことで、授業の流れやテンポがよくなり児童のコミュニケーション活動が充実した。

○振り返りカードを使うことによって、相手意識をもって前向きに取り組む活動ができた。

○教師がほめるだけでなく、児童たちが「友達のがよかったところを」を意識することで、互いに高めあう姿勢が身についた。

●オリエンテーションを行う時期

●外国語に親しむ環境の整備、児童の実態に即して乗り越えていける課題設定や活動の工

夫・改善

2 協議内容

(1) Q：児童たちが自信をもって英語を話していた。その雰囲気作りはどう作るのか。

A：オリエンテーションを行ったことで、児童たちに大きく響いた。失敗したくないという思いが大きかった。振り返りカードに友達のよい姿を記入させて、互いに高めあうことができた。

(2) Q：児童たちが思いきって発音している。どんなふうに取り組んできたのか。いろいろな国へ行ってみたいと思わせるにはどんな工夫をしたのか。

A：毎時間チャンツを行った。ELTの国の紹介や総合の時間でいろいろな国を調べた。

3 協議の柱に即したグループ協議

ゴールを見通した外国語活動の授業

- ・外国語活動も特別な授業ではなく、他の教科と同じ様々な単元計画を立て、ゴールを見通した授業を作っていくべきである。
- ・育てたい姿を見通し、そのためにどんな活動を組むか児童の実態に踏まえてアレンジする。
- ・小学校6年間をゴールとする。その集大成の姿として、英語が勉強したい、英語が好き、伝えたい、知りたい、人と関わりたいから話したいへとつなげていく。
- ・ゴールとはコミュニケーション能力の素地を養うことである。
- ・自分の思い、考えを外国語を道具として伝えること、相手の思いを聞き取って喜びを知る体験をすることである。
- ・小学校を卒業までの英語の素地作り。
- ・恐れず向き合える力を身につける。小学校6年生は通過点に過ぎない。

4 助言

- ・学習意欲を高めるものとは、授業の中で学ぶことを楽しく感じさせること。
- ・指導計画の中に達成感を味わう様々な工夫が必要。
- ・オリエンテーションでは、共通の見通しを児童と教師が持つことができる。
- ・授業における見通す力、子どもたちの変化に気づく力をもつ。
- ・子どもたちが輝いている姿を記録していく。
- ・指導者が、子どもたちの学習のモデルとなる。
- ・授業の始まりの言葉、授業の終わりで成果を提示する。
- ・小学校で外国語活動のルールを作る。そのルールの上に、中学校・高校の英語教育がのってくる。

5 まとめ（県教育委員会指導主事）

- ・どういう子どもたちにしたいかという教師の見通しをもつ。
- ・学習指導要領外国語活動において、学校でどんな子どもたちを育てたいのかという実態把握をした上でゴール設定が必要。
- ・外国語活動で目指す子どもたちの姿とは、友達とのかかわり、あいまいさにたえる、間違いを恐れない、卒業しても学び続けること。
- ・小中高のつながりが大切。